みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第13巻 地球時代に生きる

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中牧, 弘允 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4864

第13巻

地球時代に生きる

＊地球時代の日本人
＊地球時代の文明論
＊二世紀の人類像　＊国際交流の理論

「地球時代」はおそらく梅棹忠夫がはじめてつかった概念である。「グローバル化」や「グローバル時代」は東西の冷戦体制が崩壊してから人口に膾炙しはじめた。それに先立つこと約二〇年。『地球時代の日本人』（一九七四）がその先陣を切った。

本巻では「地球時代」の視点から、日本万国博覧会の意義、国際交流のありかた、民族問題のゆくえ、太平洋の文明史的意義などが縦横に論じられている。日本的経営や日本文化論が国の内外で活況を呈していたとき、梅棹は「地球時代」のなかで日本の占める位置を文明史的、文明論的にさぐっていたのである。そこから魚とクジラを対比した「日本文明クジラ論」や「化政二五〇年」を右肩上がりの曲線でしめした「近代日本の文明史曲線」など、卓抜なる比喩やモデルがうみだされた。その一方、発信能力に欠ける日本を「ブラック・ホール」にたとえて警鐘を鳴らし、国による国際交流の振興を文化的安全保障の戦略として意義づけた。

さらに梅棹は二九七〇年代の時点から二一世紀を展望し、地球の二体化がすすむ一方、民族の自己主張も加速すると指摘した。民族学や文化人類学が世界認識の基礎学問としてもっている意義も強調した。

実際、その予測は見事に的中し、二極の冷戦構造は消滅し、環境問題をはじめグローバルに対処すべき課題が軒並みに浮上した。また、民族問題も世界各地で頻発し、民族学の役割りをますます増大させている。

梅棹は地球を「人間衛星船」、人類を「全地球人」と言い換え、地球的規模で生起する動向をキャッチするだけでなく、日本や日本人が果たしうる役割りをユニークに論じた。たとえば、太平洋を極東文明と極西文明の「出あいの海」とみなし、同経度連合である西太平洋国家連合を構想した。

晩年の梅棹が監修した『地球時代の文明学』（二〇〇八）には本巻の精神がよく引き継がれている。（中牧弘允）